

第一回 基調講演

縮むマスメディア 一色清×姜尚中

第二回 「わかりやすさ」への努力と陥穽

池上彰

第三回 メディアと権力

青木理

第四回 ソーシャルメディアが変えた世界とその行方

津田大介

第五回 何がテレビ報道をダメにしたのか？ 金平茂紀

123

第六回 日本における「メディア不信」、その行方 林香里

151

第七回 フェイクニュースの正体——ネット・メディア・社会 平和博

187

第八回 総括講演

メディアは誰のものなのか？ 姜尚中×一色清

219

あとがき 一色清

248



メディアは誰のものなのか？

新聞などの活字メディアやテレビなどの映像メディアに登場するようになって以来、ずっと脳裏にあったテーマである。

極私的に言えば、戦後四〇周年の終戦記念日に向けて私は全国紙の朝日新聞に投稿し、それが採用され、顔写真入りの記事で新聞にデビューを飾ることになった。一九八五年のプラザ合意で最強の円経済の実力を示した日本が、バブル経済の宴うたげに酔っていた時代である。

敗戦から四〇年、戦勝国・米国すらも凌駕りょうがする経済大国として躍り出た日本には、ユートピアは実現されたという多幸症的な空気が広がっていた。日本はポストモダンの超先進国にして、日本のスノビズムの文化の現代版とも言えるサブカルチャーが世界を席卷せつけんし始めていた。

ポストモダンの知的意匠の大衆化とともに、戦後民主主義の理念的な批判力は減退し、曲がりなりにも論壇を形作っていた総合誌（総合雑誌）が急激に影響力を失い、社会学者の清水幾太郎の皮肉っぽい言葉を借りれば、「パツと判る漫画と、他人（ひと）は誰も読まぬ言論とは、背中合せの共犯者」（「時評」東京新聞一九七九年一〇月一日）になってしまった感すら漂っていた

のである。

活字メディアの退潮は誰の目にも明らかであった。そして新聞にとって、戦後民主主義の牽引力になってきたという矜持も、もはや盤石ではなくなっていた。

それでも、私の目には朝日新聞の「権威」はまだ輝いていたように見えた。

投稿によるオピニオンの欄は、ジャーナリズムのアマチュアの読者に開かれた「広場」のように思えたのである。平凡な読者のひとりにとって読者の「広場」という紙面は、政治の季節が終わり、公的な空間が極私的な世界に微分化された時代に残された、最後の共通の「広場」であった。

しかし、紙媒体の活字メディアが、狼狽で瞬間芸的で煽情的な映像メディアより位階的に上位に立ち、より知的であり、より進歩的であるという私の思い込みは覆されていくことになる。

一九九一年の湾岸戦争を契機にテレビ朝日の深夜討論番組「朝まで生テレビ！」に間歇的に出演するようになり、私はテレビという映像メディアの牽引力に驚かざるをえなかった。とりわけ、湾岸戦争ではリアルタイムの映像とともに、まるで戦場を俯瞰しているような疑似体験が可能になり、「速度戦」に対抗できない活字メディアは駆逐され、臨場感とリアルタイムの生々しさに溢れた映像メディアが一躍、メディアの世界を席卷するようになったのである。

だが、テレビのような映像のメディアの危うさは、世界にショックを与え、サダム・フセインへの反感を助長することになった、出所不明の、原油まみれの水鳥の映像を見ても明らかだった。直感的にその不自然さとプロパガンダ的な映像に強い不信感を持ちながらも、私はそれを、エビデンスをもって反証する術を持たないまま、テレビ・メディアの、紙媒体のような手触りのなさに苛立ちを覚えていた。

「朝生知識人」などと、半ば揶揄的な、半ばヒロイックなニュアンスで呼ばれるようになったにもかかわらず、映像メディアを代表するテレビへの違和感は、その後もなくなることはなかった。テレビには、どんなに侃々諤々の「本音」が無数の泡のように沸き立っていても、そこには新聞の投稿欄に感じていたような、共通の「仮想の広場」という感覚が欠落していたのである。いったい、テレビは、誰のものなのか？ この問いはくすぶり続けたままだった。

平成の始まりに感じた、メディアをめぐる疑念は、その後も解消されないまま、平成という三〇年に及ぶ時代が終わり、世界はグローバル化の逆流に翻弄され、メディアの存在価値すら問われようとしている。いったい活字メディアに存在理由があるのか。あるとすれば、それは誰のためなのか。

こうした問いのもと、今あらためて気付かされるのは、エスタブリッシュメントとなった新

聞などの活字メディアと、キー局を中心とするテレビ・メディアの「斜陽化」であり、ネットの仮想空間も含めて、メディアの恐ろしいほどの多様化が進み、アナキーなほど無秩序に真偽不明の情報飛び交っているにもかかわらず、同時に人々の言動がステレオタイプ化しつつあるという奇妙な現実である。このジョージ・オーウエルの「一九八四」的世界をどう読み解いたらいいのか。

私と一色清さんは、新聞、テレビ、ネット、そして大学の現場で、メディアは誰のものかを読者とともに考えるために、現在考えられうる最高の講師陣を選び、六期に及ぶ「本と新聞の大学」を閉じることにしたのである。

「本と新聞の大学」はここに一旦は閉じられてしまいが、「メディアは誰のものなのか？」というテーマは、この後も私たちの社会とその未来にとって死活的に重要な問題であり、今後も論じられなければならないはずだ。